



エッセイ：特集——記憶を育む／記憶と向き合う：子どものことばの実践を捉え直す

移動の記憶

上田 潤子 *

© 2025. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

空港，飛行機。この，どこの国にも属さないような空間が私は好きだ。いろいろな顔といろいろなことばが行き交う。私は，日本のパスポートという強い武器を懷に忍ばせ，韓国人かもしれない，中国人かもしれない，はたまた国籍は全く別かもしれない，無限の可能性を纏って，コーヒーを飲んだりしながらスパイごっこを楽しむ。30代かもしれないし，50代かもしれない，社長なのかもしれないし，大きな子どもがいるのかもしれない，そんなふうに見られているのだと思うと，自分でもそんな気がしてくる。全然違う生を生きてみたい。変身願望が空を飛ぶ。

2. 初めての移動

私の脳は，数字の記憶が極端に苦手で，自分の電話番号さえ，語呂合わせでストーリーや場面を思い浮かべないと覚えられない。その代わり，過去の情景や感情をよく覚えている。

一番古い記憶は3歳ぐらいだと思う。バレエ教室に連れて行かれて，みんなの真似をして踊らなければいけないのに恥ずかしくてできなかった。思い切って立ち上がらなければ，と焦るのだけど，そう思えば思うほどタイミングを失ってしまって固まってしまう。プライドの高さが自分をみつともない姿に追い詰めている情けなさ，連れて行ってくれた母への申し訳なさ，そういう気持ちと

* 早稲田大学日本語教育研究センター (E メール: uedajunco@aoni.waseda.jp)

あの床の冷たさははっきりと思い出せて、50年も前のこととは思えない。外見は変わろうとも、意識の流れは繋がっていて、あのときの「私」は紛れもなく今の「私」と同一の「私」だ。「三つ子の魂百までも」と言われるが、この「私」という葛藤は100歳まで続くのだろう。

当時私は代々木上原の父方の祖父母の家に両親と妹とともに住んでいて、4歳からは近所の幼稚園に通った。1970年代、日本に外国人は少なく、代々木という都会でも、金髪に青い目の「外人さん」が通ると振り返って見るほどだった。

近所の区立の小学校に間もなく入学することとなり、身体検査を受けに行った。そのとき、校庭の「のぼり棒」の前で、体育の授業ではこれを登らされるのだと母に聞き、底知れぬ不安にさいなまれた。運動が苦手な私は、幼稚園でも「でんぐり返し」に悩まされていたのだ。小学校入学直前に、未来が一転した。銀行員だった父がロンドンに転勤することになり、外国に逃げられることになったのだった。

その少し前に、偶然、祖父が出張でロンドンに行ってきた、写真を見せてくれていた。真っ赤な二階建てバスが写っていて、「こんな、遊園地の乗り物みたいなものが街の中を走ってる国があるんだ。行ってみたい!」と思った。だから、ロンドンに行くことになったと聞いたとき、あそこに行くのか、願いが叶った、という気持ちだった。ロンドンのあるイギリスでは英語が話されていると知り、友だちと「英語ごっこ」をした。ただ訳のわからないことを言って、英語を話しているふりをするのだが。とにかく、私としては、これからどういう所へ行くのか、自分なりにイメージをしての移動だった。

初めて乗った飛行機では、下に真っ白でふわふわの雲が見えて、あの上に寝てみたい、と思った。その頃好きだったサンリオのキャラクター「キキララ」は、雲の上でハープを弾いたりフルートを吹いたりしていたから、それは当然可能なはずだった。もし窓が開いたら、飛び降りていただろう。

飛行機の中が真っ暗になってみんなが寝ているとき、私が一人で起きていると、きれいな「スチュワーデスさん」が何人も来て、絵を描いて遊んでくれた。初めての飛行機は、特別なおもてなしが受けられる場所として記憶に残っている。

飛行機がヒースロー空港に着いて、黒いオースチンのタクシーに乗り込んだ。早朝で、空気が冷たくて、少し霧がかかっていた。空を見上げると、白い一筋の線があって、母が「飛行機雲」ということばを教えてくれた。人生で初めて見た飛行機雲だった。

3. その後の移動

私は引っ越しや転校が好きだった。環境が一新され、ストーリーの主人公のようになれるのでわくわくした。ロンドンには6年間いたが、最初は現地校に行き、4年生からは全日制の日本人学校に転校した（上田, 2015）。日本に帰国してからも、最初は社宅の近くの学校に通ったが、父が家を購入したために引っ越して転校した。その後は引っ越すことがなくなり、「またどこかに転勤しないの?」とよく言っていた。当時の私には自分で留学をするなどという発想はなく、移動とは、あくまでも運命的な受身のものだった。

自らの意志で能動的に移動をしたのは、大学を卒業してからだった。いろいろな国に住みたいという一心で日本語教師になった。20代は韓国と台湾、30代は中国、40代はカンボジアと移動した。韓国と台湾は民間の語学学校、中国は JICA の派遣で中等専門学校で教えた。中国で技能実習制度に携わったことがきっかけで、カンボジアでは特定技能制度で来日する人たちの日本語教育を担当した。

カンボジアに行ってちょうど1年になる頃、中国の武漢で変な病気が流行しているというニュースが流れはじめた。武漢は、私が以前住んでいた町だった。技能実習生を送り出した思い出の武漢駅がカンボジアのテレビで見る CNN ニュースに映っているのは不思議だった。やがてそれがコロナウィルスというものであると広く知られるようになり、カンボジアでも感染者が出て、誰もがマスクをするようになった。仕事が一段落ついたところで私は帰国し、日本で待機することになった。

韓国でも中国でも現地のことばを学び、当然カンボジアでもカンボジア語（クメール語）を学びはじめていた。文法がそっくりな韓国語、文字を共有する中国語とは違って、文法も文字も発音も日本語とは大きく異なるカンボジア語は、難しかった。しかしそれはつまり、カンボジア人にとって日本語が難しいということであり、そこを克服させる立場の私は、まずカンボジア語を習得しなければいけないと感じた。いずれカンボジアに戻るつもりで、コロナ禍で家にこもっている期間にカンボジア語を勉強した。カンボジア語学習の難しさの1つは、学習者人口が少ないため、外国語としての教材がほとんどないことだった。やっと見つけたオンラインレッスンに申し込んだ。先生は、カンボジアに長く住み現地の女性と結婚しているイギリス人で、自ら教科書を作っていた。中国に住んでいたこともあり、中国語もできるため、授業は英語とカンボジア語で進められ、ときどき「これは中国語の〇〇と同じですね」という話になった。

図書館や本屋を隈なく探し、カンボジアに関する本も読んだ。これもまた数は限られていたが、カンボジアの民話やボル・ポトの大虐殺についての歴史書などがあった。私が現地の生活で見聞きしたことを照らし合わせると、さまざまな謎が解けていく気がした。カンボジアで、「春」「夏」「秋」「冬」ということばを教えるとき、カンボジア以外で暮らしたことがない彼らにその概念を理解させるのに苦労した。カンボジア語にも「季節」ということばがあるが、それは「雨季」と「乾季」を指す。反対に、四季のある国にしか住んだことがなかった私には、「雨季」と「乾季」を想像するのが難しかった。「雨季」は日本の梅雨のように一日中雨がじめじめ降るのかと思っていた。ところが、実際にカンボジアに住んでみると、「雨季」といっても一日に長くて2、3時間雨が降るだけで、「乾季」には全く雨が降らないのだった。また、農家出身の生徒たちが「田舎は今、洪水です」と言うのを聞いて、私は「大変ですね」と言ったのだが、本を読んで知ったことは、カンボジアで洪水は災害ではなく、雨季にメコン川が溢れ、緩慢に大地に広がり、田畑に養分豊かな土を運ぶ、自然の恵みなのということだった（井川、1987）。そういえば、カンボジアの農村を訪れたとき、あちこちにいろいろな大きさの池ができているのを見た。釣りをしている人もいた。土地のへこんだところにメコン川から溢れてきた水が溜まり、前の年に土の中に産んであった卵が孵化して魚になる。私が見たのは、乾季に向かってだんだん水が減ろうとしているところだった。池と池の間には、いかにも少し前まで水底だったような、ぬかるんだ土地があった。彼らが辞書で調べた「洪水」ということばは、間違っていない。しかし、大前提の季節感がわかっていないと、彼らの意味するところの「洪水」が理解できない。彼らが「春」「夏」「秋」「冬」の漢字まで書けるようになって、どうしてもこの4つの順番と気温の変化が覚えられないのは、日本に住んで四季を経験したことがないからだだろう。満開の桜の花、青々とした桜の木、桜の紅葉、枝だけになった桜と雪、と写真で見せて気温を示しても、ピンと来ないのだった。

他にも、カンボジアで「常識」を覆されることはいろいろとあった。日本でマンゴーと言えば、柔らかくて甘い果物だが、カンボジアでは硬くて酸っぱい青いマンゴーに塩と唐辛子を混ぜたものを付けて食べる。爽やかな香りで、汗をたくさんかく土地ではこれがとてもおいしい。また、カンボジアではコオロギをよく食べる。佃煮のように甘辛くされたコオロギをご飯の上に載せて食べると、サクサクしてエビのように香ばしい。最近は日本でも昆虫食が流行してきているとはいえ、まだまだ気持ちが悪いと言う人が多い。しかしそれなら、生の魚、お皿の上でこちらをにらんでいる焼き魚の目、発酵してネバネバした豆など、気持ちが悪いものは日本にもたくさんある。私は移動によって「常識」の範囲が広がっていく感覚が好きなのだと思う。もし私がこの土地に生

まれていたら、という、もう一人の自分、潜在的な自分に出会いたいのだと思う。空間的な移動をしなくても、日本語非母語話者に日本語を教えるということは、日本語を外から見るということであり、私は日々、日本語の中にある私の「常識」を疑う作業をしているのかもしれない。

国境が閉ざされ、来日予定だったカンボジアの教え子たちも国で待機となった。移動できない期間は2年にも及んだ。

私が日本語教育を担当していた事業は、日本側の社長とカンボジア側の社長の意向の不一致で、解散となった。教え子たちは来日して就労できたが、私はカンボジアに戻る道を失った。他のルートでカンボジアあるいは他の国に行く方法を模索したものの、年齢のことも考え、思い切って日本に定住することにした。

4. 移動する私

時代が人をつくり、人が時代をつくる。母は戦後のベビーブームの生まれで、私は第二次ベビーブームに生まれた。第三次ベビーブームは来なかった。そして日本は空前の少子高齢化に見舞われた。

今私は、定住を決めて購入した東京のマンションで、犬と暮らしている。結婚もせず、子どももいない。でも幸せだと思っている。同居相手は犬ぐらいがちょうどいいと思っている。人口減少を補うかのように、外国人に日本語を教え、日本での生活を支援している。個人の幸福を追求した結果、時代を物語る人生になっている。

平日の日中は大学で留学生を教え、平日の夜と土曜日は自分のオンライン教室で世界のいろいろな人を教えている。オンライン教室ができるようになったのは、コロナ禍で移動が制限された期間にオンライン授業というものが普及したおかげだ。30代で会社や家に出向いて授業をしていた頃、オンラインで授業をすることを考えたことがあったが、当時は実現が難しかった。今、東京の家にいながらにして、イギリスの子ども、アメリカに住んでいるインド人主婦、ケニアの会社員、インドの会社員、日本に住んでいる中国人 IT エンジニア等々に、英語や中国語も使いながら日本語を教えている。イギリスの子どもというのは、イギリスに住んでいた頃の妹の親友のその後の同級生の子どもで、私たちが住んでいた地域に住んでいるので、話しているとまるであの頃に帰ったようだ。違うのは、簡単に空間を超えて会えるようになったことと、遠い東の未知の国が、アニメ、ゲーム、電子音楽のポップでおしゃれな聖地と化したことだ。11歳だった彼女は「トトロ」

とお寿司が好きということで日本語を学びはじめたが、13歳になった今ではGCSE（イギリスの中等教育修了資格）で日本語を選択すると言って真剣に勉強している。

移動の経験は、記憶として私の一部になっているだけではなく、現在進行形で私の生活に織り込まれている。何でも話せる親友は、24歳のとき出会った韓国人だ。韓国の語学学校で英語の先生だった彼女は、その後外資系企業の社員となっていていろいろな土地に移動した。私たちはお互いの移動先を訪れ、一緒に旅行もした。今、彼女はアメリカ人と結婚してアメリカに住んでいるが、韓国に帰国する度に日本に寄ってうちに泊まっていく。彼女とはいつも韓国語で話すので、韓国語を忘れないでいられる。30代の終わりに中国で出会った生徒たちは、当時10代だったが、30代になった。そのうち2人が、日本の大学を卒業して日本で就職し、最近帰化して「日本人」になった。私はもちろん、私の母や妹も、彼らを家族のように思っている。カンボジアの教え子たちは、東京の介護施設で順調に介護職員として働いている。いつまで日本にいるのか、帰国後はどうするのか、気がかりだが、SNSで笑顔を見るとひとまず安心する。

私の好きな小説家ミラン・クンデラは「犬の時間は一つのことから他のことへとたえず前進して直線的に進んでいくのではない。時計の針と似て、円を描いて動いている。」（クンデラ, 1998）と言っている。犬のおかげで私の暮らしも規則的になり、このままずっと同じ毎日が繰り返されるような気がしている。しかし、我々は常に未来に向かって移動していることも知っている。

5. おわりに

私はどこを目指して移動しているのだろう。

イギリスにいるときは、いつか日本へ「帰る」と思っていた。しかし、実際の日本は記憶の中の日本とは違っていて、「帰る」というより「行く」という経験だった。移動の先に待っていたのは、新たな環境だった。日本で懐かしんでいたイギリスも、離れてしまえば私の居場所ではなくなることを知っていた。だから、再び訪れるのが怖かった。大学生のとき久しぶりに一人でイギリスを訪れたが、やはり心の中のイギリスとは違った。恐らく景色は変わっていないのだが、それを見る私が変わっている。韓国は、1年間住んで、帰国し、2年後に再び同じ学校に戻った。たった2年の間に、いろいろと変わっていた。最初に行った1998年はキム・デジュン大統領が就任したばかりで、「IMF時代」と韓国人が呼ぶ歴史的な経済不況下だった。若い人のファッションは男女ともにジーパンばかりで、女性は黒っぽい濃い化粧をしていた。2001年に戻ったときには、

ポケットベルが携帯電話に取って代われ、道端で売られていた音楽のカセットテープが姿を消してMP3が主流になっていた。サッカーワールドカップの日韓共催が決まり、街がきれいに明るく変わっていたし、ナチュラルメイクとカラフルなスカートが多く見られた。そして、私の以前の友だちは、海外に留学していたり、遠くに赴任していたりで、学校の生徒も入れ替わって、私はやはり新たに自分の世界を築かなければいけなかった。移動は、いつも「行く」で、「帰る」はない。とにかく先へ、進むしかない。でも、だからこそ、人の心を強く掴むのは、ノスタルジーだ。

世界がオレンジ色に染まり、昼と夜が入れ替わる瞬間。どこかの家から温かい夕食の匂いがしてくる。ああ、私も帰ろう、と思う。でも、どこへ?差し当たり、今住んでいる家だけど、私が帰りたいのは、もっと昔の、あるいは未来の、懐かしい場所。

文献

井川一久(1987).『カンボジア黙示録——アンコールの国の夜と霧』田畑書店.

上田潤子(2015). 移動しながらことばを学ぶ『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』6, 44-52. http://gsjal.jp/childforum/journal_06.html

クンデラ, ミラン. (1998).『存在の耐えられない軽さ』(千野栄一, 訳) 集英社.